僧都禅瑜とその浄土教思想（下）

戸松憲千代

目次

一、断惑滅罪論（第五疑）

1. 諸佛論（第七疑）
   2. 諸佛論（第八疑）
   3. 諸佛論（第九疑）
   4. 諸佛論（第十疑）

結論

第七章

学系及び著書の補遺

第八章

断惑滅罪論（第五疑）

第五疑では断惑論と滅罪論の二問題を取扱ってある。しかし断惑滅罪の相異性、及び念仏滅罪の範囲を論する

ある。因

生報極楽者、

未斷惑凡夫依念仏力往生得生也。
田余

(1) 田余

(2) 田余
程度の低いものである。近くを観える師、悪悪の願品往生義が見えるとき、初め上品往生に就いて

云々。若前の別教初発心位を望むか。別教初発心位、若望別教義作は、如是知。若望別教義作

と述べ、終り下品の生においては、後十二大劫を経て漸く発心すると云ひ、而もその発心は、言発無上道心者、若

得益は別教より見て初地、圓教より眺めて初住、従ってその発心は漸く十品無明を捨断するに過ぎない。更に下品

の如き、十二大劫を経て発心する有様で、而もその発心は別教の初住、圓教の初信に至るから、やつと見断を断

るに過ぎることとなる。

右はやがて天台の彌陀浄土仏土観にも関係してくる問題であるが、とにかく、これに依って彌陀浄土に於ける断惑の

様相が観察され、また現に未断惑の凡夫が極楽浄土に往生しつつあることが察知される。滅罪の如き、と見

れるに滅罪の説文を《観經》を引例してならぬこと勿論である。

次に禅瑜の定義論に就いて一瞥する。念仏滅罪の範囲を、五十億劫は八十億劫を結ぶこと、上にも一言させる如く、往生のための処罰であるから、数えるものであるとするとならば、断惑を論

す。しかしあ《観經》では、この念仏滅罪の範囲を、五十億劫は八十億劫を結ぶとすれば、無始無量劫の生死重罪は滅せざるをなに

僧都禅瑜とその浄土教理想(下)
残存し、従って減罪往生と云ふことは事実成立せざることなる。
答、減八十億等罪者、一稱南无之力也。若多称南无、何必八十億劫、
これは、八十億劫とは一念減罪の範囲を越えたもので、多称のそれと云うたものではない。もし多称するならば、そ
難に對し、彼は初陣後陣の喻を以て左の如く説答してある。
答、例如戦之時初陣後陣、後陣更易、新義に初陣、業力強盛、故業為後陣、勢力微劣、故、是以減八十億劫、
所説の是非は曖昧にして、彼が一念減罪の範囲を八十億劫と限定せるとたちは、念仏そのもの、絶対的価値性を認め
さるもであってこの點彼の減罪観が後の法然・親鸞等のそれに大なるへたりを持つものであることを見落しては
ならぬ。しかし、かくの如きは発展の段階上にある過度時代の念佛観としては、蓋し自然なる姿であったろう。

逆説解不論（第六疑）
して観経に上文下文 Tennétのノリを認めさせるものを図経の意に依ると答譚したのである。

考察する。

右文の「除五逆誹法通教之意也に」就いて、故本多倉長は曾つて私に五義を以て解答せられた。私は、「今は如何なる意味に於いて、通教では往生を否定し、図経では之れを肯定するのであろうか。」と通教の意味よ

① 唯除と観音とは同意語である。而して、彈呵を本旨とする方等部に於いては逆誹往生を否定してゆくのが、その特徴である。従ってこの通教より見るときは、方等部に屬する方観二経の如き、また逆誹往生を唯除するのが理

② 方等部に四教の具させるごとは常の知くであるが、その中樞をなす方等部の中樞をなす、所謂「方等部之旨」たるものである。而して方等部の本旨、即ち通

③ 通教は、今も云ふ如く、方等部の中樞をなす、所謂「方等部之旨」たるものである。従ってこれに於いては當然逆誹

通教は大体、大乗教の初門、新人生である。この新人生に向って、初めより五逆誹法がそのままの説をなすものであるから、従ってこれに於いては當然逆誹

④ 通教の持つ意味は「破小乘大」を内容とする弾呵にその意義を持つものであるから、従ってこれに於いては當然逆誹

と積極的教示をなす箇はない。罪は罪、悪は悪として一徳を抑制してゆかねばならぬ。これ通教の持つ本旨


僧都義真とその浄土教思想（下）

王九
五

⑤ よほ通教そのものを本質的に見るならば、それは本来の理教たるものである。已に界内の教として、この姿

姿の外に別に余他の世界を肯認させるものである。従つて、この通教の世界に於いては往生と云ふことのあら

う状はない。往生とは此の世界を捨て、彼の世界に往く、即ち捨此往彼を意味するものである。かうした捨此往

彼を内容とする往生が、通教の化法に於いて許されるのは當然のことである。

次に通教の立場に就いて考察する。よや通教と仏教相即と云ふことを以て内容とする。まづ通教と仏教相即の

説く教なるが故に通教と云ふのである。また通教と仏教相即と云ふことより見れば若子かのの一句にその意を隠ぶことが

のと全然差別的に見てあるものが、無明の眼瞼が破れて、盗人と菩薩とが一になり来った境地を相即と云ふのである。

従てかかる「通教相即」の立場より見ることとき、食脱煩悩の煩悩のそのまゝが菩薩の道と相即されぬゆくのである。

浮士経草創の時代に存在し、また天台宗に席を置く彼としては、けだし安當なる義解と云ふべきであろう。

次に第七疑では通教不退の問題が論ぜられる。斯の論旨は、明瞭を缺くが、未断惑の凡夫が通教に往生して何
大谷學報 第二十二巻 第一号

諸経の所説は必ずしも一定していない。説くべしして説く場合もあるが、説くべしして説かざる場合もある。『法華経』の不退を説かざるが如きは後者に属す。故って難解すべき問題で

一つ、『法華経』に法を聞いて随喜聴受すれば、この人阿耨跋致なりと云ふ如きは、蓋し如来勅進の説で、方便的施設にすぎざるものに非ざるか。』(仁王経) に當知、是人即は如法、得佛不爾。とあり、また『藥師経』に持経者に説いて當知、是如來身と云ふ如き、すべてこ

の勅進説の一例である。従って本問題の主題たる彌陀経の極楽不退説の如きも、或は勅進説にすぎざるものに非さ

るか。或は如来、所説不爾。従て勅進説、或は勅進説の観は、真實の説である。但し極楽之事は

実に平凡なる解説である。如来の所説は必ずしも一途でない。勅進の説もあれば、真実の説もある。但し極楽之事は

するか。従て勅進説が可以解せざるを得ざりしものがあつたのではなかろうか。大谷學報 第二十二巻 第一号
果して然らば、彌陀の身量は六十萬億那由他由旬と改められ、極めて小量のものとなるろ。
答、雖有是釋、而猶不可及。合上の衆厳如來、豊利云、報身、故天台所釋之劣（中略） zeigt、應身無相順也。

「阿彌陀経」に六方恵利の菩薩が各々広長の舌相を出して、彌陀不可思議の功德を讃美することを説いてある。余の

諸佛讃美論（第九疑）

諸佛信揚は弥陀の本願である。第十七願云、上方諸佛が我が名号を称すものを正覚を取らし、と誓はれてある。彌陀はこの願に順じて弥陀の名号を讃美してあらわるのである。

答、四十（中略）八願云、第十願云、上方諸佛が我が名号を讃美せらるるのであらうか。故に彌陀はあくまで應身で、従って天台の彌

利益のための利他の願なるものである。云何、僧都慈経とその浄土教思想（中略）

答、如来之所為凡夫難測。往住坐臥四種威儀儀於衆生作、與業拔苦事（中略）可謂諸佛所讃美之事中、必

六五
應有「利他之事」

「こと」とに適切な解答である。行住坐臥、佛の四威儀は、すべて衆生の為のものである。第十七願は、単に我名を表すの

勇る者と云ふ利己的な願ではない。我が名を立められると、やがて名号功德を衆生に與へながための、全く利他

的願である。如来的自利はやがて利他なるべきことを忘れてはならぬ。諸佛所頼之事中必應「利他之事」

蓋し適言である。

最後に、諸佛はともに佛格たることに於いて同格である。しかるに何故、彌陀一佛のみ特に勝れ、諸佛その德を讃

答。未昇三佛位之人、得四神通於壽命延促自在也。何故一等諸佛壽量不定。或無量劫住如三彌陀也。或唯一

十年如我釋迦也。如是等事、皆諸佛之本懷。不可取一同。此の解答の意味は明かでないが、彌陀の超勝性はその寿命の無量なる點にある。而して未仏位に昇らざるものでも

四神通を得れば已に壽命延促自在なるを得るものであるから、山や佛に於いて、その壽命の延促を以て優劣差別を判定すべきでない。彌陀も諸佛もに同一格上に

存するものである。故に彌陀の如きは壽量無量、釋迦の如きは単に八十年と、壽命の長短はあるが、いずれも佛各自の意楽を

以て延促せられるもので、従つてこの壽命の長短を以て優劣差別を判定すべきでない。彌陀も諸佛もこれに同一格上に

か。諸賢の是正を仰ぎた。
略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略
我々も三頌六度の行を満足させるべく、この世に於いて五品弟子位に住し、おとが上中下三類の機に同するこ
とが出来るある。然に今何故に、近き易行の圓行を捨て、遠き難行の住行を期するのであらうか。況んや下
品三生の住行を求めて遙かに多劫を過るが如き、何の益があるであろうか。

思ふに住行は彌陀甚深の本願に誓約せられたるものである。而して住生人は臨終の夕、彌陀及び二大士の迎接にあ
づかることが出来る。また下品三生の住行の如き、たとひ多劫を過ると云ふも、一度住生を得れば必に退転させる
の得益がある。これに反し、この娑婆界は五穏悪世にして、勤行精進を欲するも嫉妬誹謗の心を生じて、これを成就
するに甚だ困難である。況んや正法の時機は己に過ぎて、證果の望みは今日である。かかる故に、此土は厭離せら
れ、極楽はあくまで欣求せらるべきである。

しかし、この正法速に過ぎて、像末の世には更に證果のものなしと云ふことは、それは多分に約しける言葉で、絶
無と云ふことを意味しける言葉ではないであろう。何となれば南岳慈恩禪師のことをは現に自ら「我れ末法の中に生れ
て六根懸の位に入ると」と述べておられるからである。六根懸とは図教の意に於れば倉は位（相似即）十信の位に過ぎさる
も、薬通二教に配すればは已に界内の感を解じて、即ち證果の位にあたるものである。かくては、像末の世に證果のも
のなれは一概に早見得させると言えるであろう。

この間に於ける禪教の解答は極めて簡単である。即ち南岳や天台は極著である。我々凡人と同列に談すべきを人
でない。その内訳は極めて位の高低である。従ってこの二聖を以て像末證果の理を成立せしめんとするは不當も甚し
華經に於後五百歳諸悪世中、受持誦誦を法華華経に乘、象之諸賢現、其人前、令得三階羅尼（撰）等、又天台大師現生在五品、滅後従生極楽、此事不論、何者信可大師是天台之後身、果をどうか、従て、現身有何不可使。
上述、経文の「於後五百歳乃至天空」は何法なりと云ふ。しかし、この五百歳に就いては異論がある。しばらく二義をあうれば、一は毘尼母論に於ての五百歳を解せるものは、五百歳にあたる。「大集経」に於ては五百歳と許するものには、二千五百歳に異なる。もし然らば、これをけて像末諸果の説文を見做して差支へないとあらう。加え、該經文の「三陀羅尼」は、また之れに二義があつて、第一義では毘陀羅尼を住行位（因數十倍）別数十倍、百千億仏陀羅尼を相似位（因數十倍）別数十倍、馬羅尼を次いでの如く仏果中の三諦にあつて、ともに初住（別數十地）の位と見做すのである。像末に説果の存すること、明々白々たる事實である。

これに対して、禅徳は答、正法中、有二行証、像法中、有二行論、末法中、有無行論者、是道相所指也。以此事不可離法相道相理也。又依經力見之賢賢得三陀羅尼未為三賢徳之之義。
第七章 学系及び著書の補遺

仏壇造形は、日本の仏教美術の発展を示す重要な要素で、その発展に伴う変化を理解するためには、学系及び著書の補遺が重要である。

仏壇の変化は、時代によって異なり、平安時代の仏壇は形態的に大きく変わり、室町時代に進化した。しかし、その間の変化は、伝統的要素と新元素の融合によるもので、仏壇の芸術性と美的価値を高めることが目的であった。

仏壇の形式は、変化するが、その根拠は仏教の教義に根ざす。仏壇の形状は、仏の形を象徴するもので、仏の教義を示す重要な役割を果たす。仏壇の製造に携わる職人たちは、仏の教義に精通し、その心を佛壇に湛え、仏壇の美を追求した。

仏壇の変化は、仏教の教義に伴うもので、仏壇の変化は、仏壇の芸術性と美的価値を高めることが目的であった。仏壇の製造に携わる職人たちは、仏の教義に精通し、その心を佛壇に湛え、仏壇の美を追求した。
観経とその準式教思想（下）
(请参考其他注释)《第四节排卵期》

(请参考其他注释)《第五节排卵期》